

殺処分から逃れ、 幸せに暮らす犬もいます

宮崎県中央動物保護管理所で起こった ひとつの奇跡。「ひまわり」のストーリー

日本全国の保健所や動物愛護(管理)センターなどでは、多くの犬や猫が保護されています。捨てられたり、迷子になっていて捕獲されたり、あるいはさまざまな事情から引取られたものの、次の飼い主が見つからずに殺処分となってしまふ尊い命。その数は、年間約30万頭です。

しかし、職員さんや民間のボランティアの方々の、ひとつでも多くの命を救いたいという思いと努力が実り、新しい飼い主が見つかって、今は幸せに暮らす動物たちもいます。

2007年2月7日、住民の通報により、宮崎県で1頭の雌犬と3頭の子犬が捕獲されました。まだ目も開かず、歩くこともできない子犬たち。「子どもを置いていけば逃げられたのに、母犬はまったく逃げようとしなかった」——この母犬は、檻

に入れられたのちも、子犬たちを守るために、近づく人間を激しく威嚇し、吠え続けました。一方、子犬たちにはやさしく、1日中側を離れずに面倒を見ているのです。

必死で我が子を守ろうとする母犬と、「なんとか命を助けたい」と願う管理所の職員さんたち。本来、命の期限は7日間ですが、職員さんの努力により期限が3週間に延長されました。そして、人間不信に陥っている母犬に「何もしいから大丈夫だよ」と毎日、檻の外から話しか

け、辛抱強く世話を続けたある日のこと。いつもは威嚇する母犬が、じっと座ったまま職員さんを見つめ、自分の体を触らせたのです。「うちのコになるか?」——奇跡の起こった瞬間でした。

「もう野良犬じゃない。人間におび

えなくても大丈夫。太陽の下を堂々と歩けるよ」という思いを込めて、この母犬は「ひまわり」と名付けられました。今は人に甘える心地良さも、褒めてもらった時のうれしさも覚え、職員さんと一緒に幸せに暮らしています。しかし「ひまわり」のような出来事は本当に稀有なことです。この幸運の陰には、何頭もの処分されてしまった犬たちがいることを忘れないでください。

